

港に着いた黒んぼ

小川未明

青空文庫

やつと、十とおばかりになつたかと思おもわれるほどの、男おとこの子が笛ふえを
 吹ふいています。その笛ふえは、ちようど秋あき風かぜが、枯かれた木きの葉はを鳴な
 らすように、哀あわれな音おとをたてるかと思おもうと、春はるのうらかな日ひに、
 緑みどりの色いろの美うつくしい、森もりの中なかでなく小鳥ことりの声こゑのように、かわいらしい
 音おとをたてていました。

その笛ふえの音ねを聞きいた人々ひとびとは、だれがこんなじようずに上じ手てに、また
 哀あわれに笛ふえを吹ふいているのかと思おもつて、そのまわりよに寄よつてきまし
 た。するとそれは、十とおばかりおとこの男この子こで、しかもその子こ供どもは、弱よ
 々わしく見みえたうめくらえに、盲めくら目めであつたのであります。

人々ひとびとは、これを見みて、ふたたびあつみけにとられていました。

「なんと、不憫な子供だらう？」と、心に思わぬものはなかつた。

しかし、そこには、ただその子供が、一人いたのではありませぬ。その子供の姉さんとも見える十六、七の美しい娘が、子供の吹く笛の音につれて、唄をうたつて、踊つていたのでありました。娘は、水色の着物をきていました。髪は、長く、目は星のように輝いて澄んでいました。そして、はだしで砂の上に、軽やかに踊っている姿は、ちようど、花弁の風に舞うようであり、また、こちよの野に飛んでいる姿のようでありました。娘は、人恥ずかしそうに低い声でうたつていました。その唄は、なんという唄であるか、あまり声が低いので聞きとることは、みんなにで

きなかつたけれど、ただ、その唄をきいていると、心は遠い、か
 なたの空を馳せ、また、さびしい風の吹く、深い森林を彷徨つ
 ているように頼りなさと、悲しさを感じたのであります。

ひとびと
 人々は、この姉と弟が、毎日どこから、ここにやってきて、

こうして唄をうたい、笛を吹いてお金をもらっているのか知りま
 せんでした。それは、どこにもこんな哀れな、美しい、またやさ
 しい、乞食を見たことがなかつたからであります。

この二人は、まったく親もなければ、他に頼るものもなかつた。
 この広い世界に、二人は両親に残されて、こうしていろいろ
 とつらいめをみななければならなかつたが、中にも弱々しい、盲
 目の弟は、ただ姉を命とも、綱とも、頼らなければならなかつた

のです。やさしい姉は、不幸な弟を心から憫れみました。自分の命に換えても、弟のために尽くそうと思ひました。この二人は、この世にも珍しい仲のよい姉弟でありました。

おとうと弟は、生まれつき笛が上手で、姉は、生まれつき声のいいところから、二人は、ついにこの港に近い、広場にきて、いつごろからともなく笛を吹き、唄をうたつて、そこに集まる人々にこれを聞かせることになつたのです。

朝日が上ると二人は、天気の日には、欠かさずに、ここへやつてきました。姉は、盲目の弟の手を引いてきました。そして、終つて、どこへか、二人は帰つてゆきました。

ひかがや
日ひが輝かがいて、あたた暖かな風かぜが、やわ柔らかな草くさの上うえを渡わたるときは、ふえ笛ふえの音ねと唄うたの聲こえは、もつれあつて、あか明あかるい南みなの海みうみの方ほうに流ながれてゆきま
した。

あね姉あねは、まいにち毎まいにち日まいにちのようように、おどここうして踊おどつたり、うた唄うたをうたつたりし
ましたけれど、おとうとふえ弟おとうとふえの笛ねの音きを聞きくと、つかいつかつも、つか疲つかれるといいうこと
をすこしも身みに覚おぼえませせんでした。

がんらいうちき元がんらいうちき来来内内気気なこの娘むすめは、ひとびと人ひとびと々々がまわりまわりにたくさん集あつまつて、
みんなが目めを自じぶん分分の上うえに向むけていいると思おもうと恥はずかしくくて、しぜ
ん唄うたの聲こえも滅めい入いるようように低ひくくははなりなりましたけれど、おとうと弟おとうと
の吹ふく笛ふえの音ねに耳みみを傾かたむけると、じぶん自じぶん分分は、ひろ広ひろい、ひろ広ひろい、はな花はなの
咲さき乱みだれた野の原はらの中なかで、ひと独ひとり自じゆう由由に駆かけていいるようような心こころ地ちがして、

大胆だいたんに、身みをこちようのように軽く跳ね上げて、おもしろく踊おどつていたのでした。

ある夏なつの日ひのことでありました。その日ひも太陽たいようは、早くから上あがって、みつばちは花はなを探たずねて歩あるき、広場ひろばのかなたにそびえる木立こたちは、しよんぼりと静しずかに、ちようど脊せの高たかい人ひとが立たつていますように、うるんだ空そらの下したに浮うき上あがって見みえました。

港みなとの方ほうでは、出で入いりする船ふねの笛ふえの音おとが、鈍にぶく聞きこえていました。明あかるい、あめ色いろの空そらに、黒くろい煙けむりの跡あとがわずかに漂ただよっている。それは、これから、青あおい、青あおい波なみを分わけて、遠とおく出でてゆふく船ふねがあるのでありました。

その日ひも、二ふたり人のまわりには、いつものごとく、人ひとが黒山くろやまの

ように集あつまっています。

「こんないい、笛ふえの音ねを聞きいたことがない。」と、一人ひとりの男おとこがい
いました。

「私わたしは、ほうぼう歩あるいたものだが、こんないい笛ふえの音ねを聞きいたこ
とがなかった。なんだか、この笛ふえの音ねを聞きいていると、忘わすれてし
まった過か去このことが、一つ、一つ心こころの底そこに浮うかび上あがって目めに見み
えるような気きがする。」と、他たの一人ひとりの男おとこがいいました。

「あれで目めがあいていたら、どんなかわい男おとこの子こでしょう。」
と、ある一人ひとりの女おんながいいました。

「私わたしは、あんな器きり量りょうよしの娘むすめを見みたことがない。」と、他たの年とし
をとった、荷物にもつをかついだ旅たびの女おんならしい人ひとがいいました。

「あれほどの器量きりようなら、こんなことをしていなくてもよさそうなものだ。あんな美しい娘うつくむすめなら、だれでももらい手てがあるのにと、脊せの低い男ひくおとこがのびあがって、あちらを見みながら、いつていました。

「きつと、あれには、だれかついていっているものがあるでしょう。そして、金かねもうけをしようというのでしよう。」

「いいえ、あの娘むすめは、そんな下卑げびた子供こどもではありません。きつと、

あの弟おとうとのために、こうして苦労くろうをしているのです。」と、さつきから黙だまって、じつと娘むすめの踊おどるのを見みていた女おんなの人がいいました。

人々ひとびとは、思い思いおものことをいいました。中なかには、金かねを足あしもとへ投なげてやったものもありました。中なかには、いろいろのことをし

やべりながら、いつか消えるように、銭もやらずに去ってしまったものもありました。

つつがなく、やがて、その日も暮れようとしていました。海の
 上の空を、いぶし銀のように彩って、西に傾いた夕日は赤く見え
 ていました。人々は、おいおいにその広場から立ち去りました。
 うす青い着物をきた姉は、弟をいたわって、自分たちもそこを去
 ろうとしたときであります。

ひとり 一人の見なれない男が、姉の前に進み出しました。

「この町の大尽のお使いでまいったものです。ちよつと大尽
 がお目にかかつてお話ししたいことがあるからいらつしてくださる
 ように。」といいました。

姉あねは、これまでこんなことをいったものが、幾いくにん人もありまし

たから、またかと思おもいましたが、その大だいじん尽じんというのは、名なの聞き

こえている大金おおがねも持ちだけに、娘むすめはすげなく断ことわることもできない

という気きがして、少すくなからず当とうわく惑まどいたしました。

「どんなご用ようがあつて、わたしにあいたいと申もうされるのですか？」

と、姉あねは、その使つかいの男おとこにたずねました。

「私わたしにはわかりません。あなたがいらしてくださればわかること

です。けつして、あなたのお身みにとつて悪わるいことでないことだけ

はたしかであります。」と、その男おとこは答こたえました。

「わたしは、弟おとうとを置いて、どこへもいくことはできません。弟おとうとを

連れていってもいいのでしょうか？」と、姉あねはたずねました。

「弟さんのことは、聞いてきませんでした。大尽は、なんでもあなた一人に、お目にかかってお話をしたいようです。けれどけつして手間を取らせません。あすこへ馬車を持ってきています。それに、日も、まだまったく暮れるには間がありますから……。」と、その男はいいました。

姉は、黙つて、しばらく考えていましたが、なんと思つたか、「そんなら、きつと一時間以内に、ここまで帰してくださいませか。」と、男に向かつてたずねました。

「おそらく、そんなには時間を取らせますまい。どうか、せつかく使いにまいつた私の顔をたてて、あの馬車に乗つて、一刻も早く大尽の御殿へいらしてください。いまごろ大尽は、あなた

の見えるのをお待ちでございます。」と、男はいいました。

あちらに、草の上ですわつて、手に笛を持っておとなしく、弟は、姉のくるのをまつていました。

姉は、思案に沈んだ顔つきをして、着物のすそを夕風になぶらせながら弟のそばへ、はだしのまま近寄つてきました。そして、目は見えぬながら微笑んで、姉を迎えた、弟に向かつて、

「姉さんは、ちよつと用事があつていつてくるところがあるのよ。おまえは、どこへもいかずに、ここに待つてておくれ、すぐに姉さんは帰つてくるから。」と、やさしくいいました。

弟は、盲目の目を、姉の方に向けました。

「姉さんは、もう帰つてこないのではないの。僕は、なんだかそ

んなような気がするんだもの。」といいました。

「なぜ、そんな悲しいことをいうの。姉さんは、一時間とたたな

いうちに帰つてきてよ。」と、姉は、目に涙をためて答えました。

弟は、やつと姉のいうことがわかつたみえて、黙つてうなずき

ました。

姉は、使いの男につれられて、いかめしい馬車に乗りました。

馬車は、ひづめの音を砂地の上にとたて、日暮れ方の空の下をか

なたに去りました。

弟は、そのひづめの音が遠く、かすかに、まったく聞こえなく

なるまで、草の上ですわつて、じつと耳を澄ましていました。

一時間はたち、二時間はたつても、ついに姉は帰つてきません

でした。いつしか、日はまったく暮れてしまつて、砂地の上は、

しつとりと湿り気を含み、夜の空の色は、藍を流したようにこく

なつて、星の光がきらきらと瞬きました。港の方は、ほんのりと

して、人なつかしい明るみを空の色にたたえていたけれど、盲目

の弟には、それを望むこともできませんでした。

ただ、おりおり、生温かな風が沖の方から、闇のうちを旅

してくるたびに、姉の帰るのを待つてゐる弟の顔に当たりました。

弟は、もはやたえられなくなつて、泣いていました。そして、姉

は、どこへいったらう。もうこれぎり帰つてこなかつたらどうし

ようと心細くなつて、涙が流れて止まらなかつたのでありま

す。

いつも姉は、自分の吹く笛の音につれて、踊ったと思うと、弟は、もし自分の吹いた笛の音を聞きつけたら、きつと姉は、自分を思い出して帰ってきてくれるにちがいないと思ひました。

おとうと 弟は、熱心に笛を吹き鳴らしました。かつて、こんなに心を入れて、笛を吹いたことはなかつたのであります。姉は、この笛の音をどこかで聞きつけるであろう。聞きつけたら、きつと自分を思い出して帰ってきてくれるにちがいない、と、弟は思ひました。おとうと 弟は、それで、熱心に笛を吹き鳴らしました。

ちようど、ここに一羽の白鳥があつて、北の海で自分の子供をなくして、心を傷めて、南の方へ帰る途中でありました。白鳥は黙つて、山を越え、森を越え、河を越えて、青い、

あおうみとおあと みなみほう
 青い海を遠く後にして、南の方をさして旅をしていました。白
 よう つか なが ほとり お つばさやす
 鳥は疲れると流れの辺に降り、翼を休めて、また旅に上りまし
 た。かわいい子供をなくして、白鳥は、歌う気にもなれな
 ったのです。ただ、黙つて暗い夜を、星の下を駆けていました。
 はくちよう
 白鳥は、ふと、悲しい笛の音をききました。それは、普通
 ひと ふ ふえ ねいろ おも
 の人の吹く笛の音色とは思われない。なんでも胸になやみのある
 ものが、はじめてこんな笛の音色を出し得ることを白鳥は知
 りました。白鳥は、子供をなくして、しみじみと悲しみを味
 わっていましたから、その笛の音色をくみとることができたので
 す。

はくちよう
 白鳥は、その目に見えない細い糸の、切れては、また、つ

づくような、悲しい音色がどこから聞こえてくるかと翼をゆるやかに刻んで、しばらくは夜の空をまわっていました。やがて、広場から起こることを知りました。白鳥は、注意深くそのひろばに降りたのであります。そして、そこに、一人の少年が草の上ですわって、笛を吹いているのを見ました。

白鳥は、少年に近づきました。

「どうして、こんなところに、たった一人で笛を吹いているのですか。」とたずねました。

盲目の少年は、やさしい声で、だれかこうしんせつに聞いてくれましたので、少年は、姉が自分をここに置いて、どこへか行ってしまったことをありのままに告げました。

「ほんとうに、かわいいそうに。わたしが、姉ねえさんにかわってめんどうを見てあげます。わたしは、子供こどもをなくした白鳥はくちようです。これから、あちらの遠い国とくへ帰ろうと思おもっています。二人は、南の国くにへいって、波なみの穏おだやかな岸きしべで笛ふえを吹ふいたり、踊おどったりして送りおくしましょう。わたしは、いまあなたをわたしとおなじ白い鳥しろとりの姿すがたにしてあげます。海うみを越こえ、山やまを越こえてゆくのですから……。」

と、白鳥はくちようはいいました。

ついに、盲目めくらの少年しょうねんは、白い鳥しろとりとなりました。夜のうちに、二羽わの白鳥はくちようは、このさびしい、暗くらい広場ひろばから飛とびたつて、ほんのりと明あかるく、空そらを染そめた港みなとを見下みおろしながら、その上うえを過すぎて、遠とほくいずこへとなく、消きえ去さってしまいましたのであります。後あと

には、空そらに星ほしが輝かがやいていました。大地だいちは黒くろく湿しめつて、草木くさきは音おとなく眠ねむつていました。

姉あねは、それから程ほど経へて、大尽だいじんの屋敷やしきからもどつてきました。思おもつたより、たいへんに時間じかんがたつたので、弟おとうとはどうしたろうと心配しんぱいしてきたのであります。けれど、そこには、弟おとうとの姿すがたが見みえませんが、どこを探たずねても見みえませんでした。星ほしの光ひかりが、かすかに地ちの上うえを照てらしています。そこには、いままで目めに入はいらなかつた月見草つきみそうが、かわいらしい花はなを開ひらいていました。そして、これもいままで見みなかつた、姉あねの青あおい着物きもののえりに、宝石ほうせきが星ほしの光ひかりに射いられて輝かがやいていました。

明あくる日ひから、姉あねは、狂人きちがいのようになつて、すはだしで港みなとの

まちまちある町々を歩いて、弟を探しました。

月の光が、しつとりと絹糸のように、空の下の港の町々の

屋根を照らしています。そのの、果物屋には、店頭には、遠く

の島から船に積んで送られてきた、果物がならんでいました。

それらの果物の上にも、月の光が落ちるときに、果物は、は

かない香りをたてていました。また、酒場では、いろいろの人

々が集まって、唄をうたったり、酒を飲んだりして笑っています。

した。その店頭のガラス戸にも、月の光はさしています。また、

港にとまっている船の旗の揺れている、ほぼしらの上にも月の光

は当たっています。波は、昔からの、物憂い調子で、浜に寄せ

ては返していました。

おとうと
 姉は、あてもなくそれらの景色をながめ、悲しみに沈みながら、
 弟をさがしていました。けれど、弟は、どこへいったのかわかり
 ませんでした。

一日、この港に外国から一そうの船が入ってきました。やが
 て、いろいろなふうをした人々が、港の陸へうれしそうに上が
 ってきました。なんでも、南の方からきたので、人々の姿は軽
 やかに、顔は日に焼けて、手には、つるで編んだかごをぶらさげ
 ていました。それらの群れの中に、見なれない、小人のように脊
 の低い、黒んぼが一人混じっていました。

黒んぼは、日当たりの途を歩いて、あたりを物珍しそうに、
 きよろきよろとながめながらやってきますと、ふと、町角のと

ところで、うす青あおい着物きものをきた娘むすめに出であいました。娘むすめは黒んぼを、
 物もの珍めづらししそうに振り返かえりますと、黒んぼは立たち止どまつて、不ふ思し
 議ぎそうに、娘むすめの顔かおを見みつめていましたが、やがて近ちか寄かよつてまいり
 ました。

「あなたは、南みなみの島しまで、唄うたをうたつていた娘むすめさんではありません
 か。いつ、こちらにこられたのですか。私わたしは、あちらの島しまをたつ
 前まえの日ひに、あなたを、島しまで見みましたはずですが。」と、黒んぼは
 いいました。

姉あねは、不ふ意いに問といかけられたのでびっくりして、

「いえ、わたしは南みなみの島しまにいたことはありません。それはきつと
 人ひと違ちがいいです。」と答こたえました。

「いや、人違いでない。まったくあなたでした。水色の着物をきて、盲目の十ばかりになる、男の子が吹く笛の調子に合わせ、唄をうたつて踊っていたのは、たしかにあなたです。」と、黒んぼは疑い深い目つきで、娘をながめながらいいました。

姉は、これを聞くと、さらにびっくりしました。

「十ばかりの男の子が笛を吹いている？　そして、その子供は盲目なんですか？」

「それは、島でたいした評判でした。娘さんが美しいので、島の王さまが、ある日金の輿を持って迎えにこられたけれど、娘は弟がかわいそうだといって、お断りしてゆきませんでした。その島には、白鳥がたくさんすんでいます、二人が笛を吹い

たり、踊おどつたりしている海岸かいがんには、ことにたくさんな白鳥はくちようがいて、夕暮ゆうぐれ方がたの空そらに舞まつているときは、それはみごとであります。」と、黒んぼくろは答こたえて、それなら、やはり、この娘むすめは人ひと違がいかというような顔かおつきをしていました。

「ああ、わたしは、どうしたらいいだろう。」と、姉あねは、自分じぶんの長ながい髪かみを両手りやうてでもんで悲かなしみました。

「もう一人ひとり、この世よの中なかには、自分じぶんというものがあつて、その自分ぶんは、わたしよりも、もつとしんせつな、もつと善ぜん良りような自分じぶんなのであろう。その自分じぶんが、弟おとうとを連れていってしまったのだ。」
と、姉あねは胸むねが張はり裂さけそうになつて、後悔こうかいしました。

「その島しまというのは、どこなんですか。わたしは、どうかしてい

つてみたい。」と、姉あねはいいました。

黒くろんぼは、このとき、港みなとの方ほうを指ゆびさしながら、

「ずつと、幾いく千里りとなく遠とおいところに、銀ぎん色いろの海うみがあります。

それを渡わたつて陸おかに上あがり、雪ゆきの白しろく光ひかつた、高たかい山やま々やまが重かさなつ

ている、その山やまを越こえてゆくので、それは、容よう易いにゆけるところ

でない。」と答こたえました。

このとき、夏なつの日ひは暮くれかかつて、海うみの上うえが彩いろどられ、空そらは、昨き

日のうのように真まつ赤かに燃もえて見みられました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「童話」

1921（大正10）年6月

※表題は底本では、「港《みなと》に着《つ》いた黒《くろ》んぼ」となっています。

※初出時の表題は「港に着いた黒んぼの話」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

港に着いた黒んぼ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>